

映像資料「龍谷の森の秋・自然体感ワークショップ」の作成

土屋 和三

(1) 映像作成の目的

今回作成した映像資料は、今までおこなってきた研究や実践を、映像、音声、説明テロップによって、文字情報では伝えきれない情報も含めて理解することを可能とするものであり、自然教育、環境教育や教育学、芸術教育など多方面の教材として活用することを目的として作成したものである。里山の自然を活用した自然環境教育と造形活動との連携による新領域の普及のために、「瀬田っこいきいき自然体験教室」（2003年10月25日）での映像記録をもとに、映像資料（VHSとDVD、29分）を編集した。

人のかかわりによりつくりだされた「里山」は、本来、狭い学問領域に分断されて研究されるには限界がある。したがって里山をフィールドとして、自然、人文、社会、教育、芸術領域を中心とした多学問領域の参加、学際的研究をおこなってきた。したがって、この映像資料は、これらの領域の教材として使用できるものをめざした。撮影は、芸術大学の学生が教員の指導のもとにおこなった。

映像資料には、上記の学際的研究領域内容と共に、その学問領域を実践していく際に必要となってくる研究者と学生、地域社会の人々との連携の必要性が示されている。今回の映像資料は、大津市瀬田公民館の「瀬田っこいきいき自然体験教室」の協力事業としておこなった活動内容を編集したものであり、この活動には、龍谷大学と京都造形芸術大学の学生、おおつ環境フォーラム、「龍谷の森」里山保全の会が、共同参画した。

また学びの場としては、子どもたちは、このような学際的な領域の内容を複合的に体験し、吸収していく方法が自然であり望ましいが、そのプロセスが映像のなかで一日の過程を通じて示されている。

現在、教育学や教育現場においても、「経験」の復権を中心に再評価が進んでいる教育

学の祖であるJ. デューイの教育論においても、「経験というものには、地理的な側面、芸術的で文学的側面、さらには科学的側面もあれば歴史的な側面もある」（『学校と社会』、152頁）とのべており、さまざまな経験は、生活過程のなかで他の経験と交わり、各教科の孤立性を避け、複合的経験として子どもに体験されることがめざされている。

デューイは、その理念をシカゴ大学の付属小学校として実践したが、学校は、互いに孤立している各部分の複合体ではなく、一つの有機的な全体をなすようなものにするよう努められ、各教科の孤立性や学校制度の各部分の孤立性の解決がめざされている。また大学院生が調査研究や研究方法をたずさえて実験室学校へやってきて、いろいろなアイデアや問題を提示し、幼いこどもの教育と、成熟していく青年の教育を分離している障壁を打破することが必要であると考えている。

デューイが重視したのは領域間の打破であり、それを可能とするコミュニケーションである。今回の映像資料には、さまざまな大学の、多様な専門の教員や 学生、地域の人々がそれを形成しているようすが映されている。また子どもたちが、一日の「経験」のなかで、それらの人々とのコミュニケーションのもとで、自然やアートを複合的に学んでいるようすが、伝わってくる。木の葉や木の実、きのこを採取し、それをスタンピングする行為、子どもたちの驚き、笑いなどの豊かな表情が映しだされている。このような映像による情報は豊かであり、鑑賞する人にもその内容が直接的に伝わるので、極めて重要であると思われる。

(2) 「龍谷の森」の里山での環境教育の実践研究と映像資料の内容

では、以下で、映像に示されている「龍谷の森」の里山での環境教育の実践研究について、簡単に示しておくこと、このような、大学と地域社会との協働による「あたらしい里山づくり」という活動のなかで、自然に対する関心を中心にして、多様な人（年齢・分野）が参加する混成体が網の目のように社会に広がっていくことで、既存の自然教育システムを変化させていくことが可能である（土屋和三ほか 2002年）。

今回の映像資料の内容である大津市瀬田公民館の委託による、「龍谷の森」で開催した「瀬田っこいきいき自然体験教室」（2003年10月25日）での実践は、里山における「共同参加型自然教育」として、その概要をすでに報告した（土屋和三ほか2004年）が、それは、これまでの「龍谷の森」での「あたらしい里山づくり」の活動と植物学のもと

づく生き物とのふれあいと、京都造形芸術大学の洋画・美術教育と理論系教員の参加による芸術活動と遊びを連携させた試みである。

映像資料には、午前と午後の内容が含まれているが、午前は「龍谷の森」での自然体験・生き物とのふれあいと造形活動のための材料集め、午後は龍谷大学青雲館での植物を用いたスタンピングによる造形活動とカレンダー製作をおこなった。

自然体験には、植物研究者と「龍谷の森」の里山づくりに関わってきた地域住民・学生・教職員からなる「龍谷の森」里山保全の会の会員、造形活動には、京都造形芸術大学の教員と学生が相互に共同参加し、密度の濃い連携が成立するように工夫した。

なお、その後の「龍谷の森」では、森田実穂（2005年）は、「多世代の交流による参加型造形ワークショップ」（2004年12月5日）を開催し、あらたな技法も展開し、さらに京都造形芸術大学の学生達による身体表現（体感した自然を即興で身体で表現する）も加え、造形活動と里山の利用、自然を通じた造形教育の新たな可能性や他教科との関連を展開している。

さらに、大津市立瀬田北小学校6年生の里山学習（2006年2月9日）では、自然のものを使っての表現活動として、葉のスタンピングによる「里山アートコース」（参加者80名）が、京都造形芸術大学学生2名の指導により開催されている（下村幸子2006年）。

このほかに「龍谷の森」では、大津市立瀬田北小学校の児童が里山から採取した木の枝などのありふれた素材をノコギリやキリで加工して、ケンダマ、コマ作り、自由遊び遊具などの木工工作などを行い（森田実穂、梅田倫子：好広真一ほか2003年 所収資料2）、おおつ環境フォーラム会員によるブンブンコマ作りなどの、自然の中で五感を触発する自然体験の場が提供されている。

「あたらしい里山づくり」では、里山での自然体験・生きものとの触れあいだけでなく、三阪佳弘氏（里山ORC）が指摘するように、参加した子どもたちが里山から持ち帰り楽しむことができるものをつくりだす創意・工夫が必要である。これは、さらに多くの人たちが里山と触れあい、感性を拓く機会にもつながる。

葉っぱのスタンピングによってつくったカレンダーは、一年中、自らがこなした里山での木の葉の採集やそのスタンピングを思い出すことができる。このように、教育の領域拡大の試みを続けて、里山の素材を活用して実践的な造形活動を開発し、参加者の感性をひろげる試みをおこなってきた。

(3) 映像資料の構成と概要

以下に、映像開始からの時間（分：秒）、「文字画面」と映像に挿入した「テロップ文字」を記す。

(0 : 00)

(文字画面) 「龍谷の森の秋」自然体感ワークショップ

(文字画面) <この日の活動目的>

午前：龍谷の森での自然体験

午後：自然を体感するアート

(文字画面) <多様なネットワーク形成による「共同参加型自然教育」>

2年前からのシイタケづくり： 「龍谷の森」里山保全の会

自然環境の説明・環境整備： 「龍谷の森」里山保全の会

自然教育ボランティア： 龍谷大学里山サークル「きのこっ子」学生

芸術ワークショップ：京都造形芸術大学教員（美術教育法、洋画）

芸術ワークショップボランティア：京都造形芸術大学 実技系学生

映像・記録づくりボランティア：京都造形芸術大学教員（理論系）、学生

(文字画面) <参加者>

大津市瀬田公民館，自然教室の親子（子ども 40人、親30人）

(文字画面) <午前> 里山を歩き自然から学ぶ

植物とキノコの説明と採集

シイタケのホダ木づくりの説明とシイタケ取り

(映像画面に挿入した) テロップ文字

(1 : 00) (クラリネットの演奏（音声）とともに森にはいる)

(4 : 10) ドクツルタケ

- (5 : 40) 「龍谷の森」保全の会の会員によるシイタケの取り方の説明、
シイタケのホダ木づくりは、2002年から「龍谷の森」里山保全の会
(地域住民、学生、教員)等により行われている
- (9 : 35) 午後のアートに使う葉の説明
- (10 : 45) 午後のアートに使うコシアブラの採集
- (11 : 22) 間伐材のチップを利用したヒラタケ栽培実験の説明
- (12 : 23) アカメガシワの説明

(文字画面) <午後> 午前中に採集した植物を用いたアート

(14 : 00) 自ら採集した葉の葉脈やかたちを確かめながら、色を塗ってスタンプング
してカレンダーづくり色は3原色(赤・青・黄)、白に制限し、混ぜ合わせ
て多様な色をつくることを工夫する

木の枝を削って描くことも行う

(15 : 25) コシアブラの葉でスタンプング

(16 : 00) 3原色(赤・青・黄)、白を混ぜて混色し、さまざまな色づくりはじめる

(18 : 30) アカメガシワの葉でスタンプング

(20 : 35) 木の実をころがす

(25 : 25) スタンプングした紙をカレンダー用紙にはる

京都造形芸術大学 森田実穂先生

(28 : 12)

(文字画面) <ボランティア・学生・親子のコミュニケーションを通じてのワークショ
ップ>

自然への関心を中心にしながらかんやかに形成された多層のネットワークの
人々がさまざまな役割をもちながら子どもへの自然教育プログラムに共同
参加した

(文字画面) <自然とアートを連携させた参加型ワークショップ>

子どもは受け身で説明を聞くだけでなく、造形アートを通じて楽しみなが

ら自然を体感することが可能になる。

(文字画面) 企画・編集

龍谷大学教員 土屋和三

京都造形芸術大学教員 森田実穂

京都造形芸術大学教員 藤澤三佳

撮影 京都造形芸術大学芸術文化学科学生 代田奈津子

技術 京都造形芸術大学映像・舞台芸術学科学生 中山佐代

(29 : 30)

参考文献

土屋和三・好広真一・田中真介・久米直明・松田千都・中山善行 (2002)

「人間発達における自然体験の基礎研究 一生態学・教育心理学の視点から」『FD・教材等研究開発報告書』第4号 龍谷大学、pp. 79-90

好広真一・土屋和三・田中真介・久米直明・松田千都・中山善行 (2003)

「人間発達における自然体験の基礎研究」『FD・教材等研究開発報告書』第5号 龍谷大学、pp. 51-71

土屋和三・岡崎晋明・好広真一・田中真介・須川恒・松田千都 (2004)

「特別講義 里山学へのいざないの内容編成・教育評価およびその後の展開」『FD・教材等研究開発報告書』第6号 龍谷大学、pp. 61-94

森田実穂 (2005)

「多世代の交流による参加型造型ワークショップ」『龍谷大学里山学・地域共生学オープン・リサーチ・センター2004年度年次報告書』 pp.159-171

下村幸子 (2006) 「里山学習で得たもの—大津市立瀬田北小学校6年生の実践から—」『龍谷大学里山学・地域共生学オープン・リサーチ・センター2005年度年次報告書』 pp.158-164

J. デューイ 市川尚久訳『学校と社会・子どもとカリキュラム』講談社、1998



